

幼児における



「問題をもつ子」の実態調査

田中教育研究所研究部

従来ややもすると「手のつけられぬもの」とされ「お客さま」扱
いされていた問題児が、最近その発生要因や指導法が次第に明らか
にされ、これを早期に発見して治療し、あるいはその発生を未然に
予防しようとする傾向になっていることは喜ばしいことである。し
かし一口に問題児といってもその概念が明確でなく、同じ類型でも
一人ひとり異なった現われが見られるので、これを学問的に取り上
げて研究するのに困難があった。

私も研究所では研究部の一つの仕事として一昨年来、鈴木、間
宮、品川（不）、茂木、田中（英）、品川（孝）、安富、松原の八名が担
当し、問題児の実態と指導法について実証的な研究を進めている。
実態については、予め行動の現われについてある程度の基準を設
け、それに該当するものがどのくらい存在するかをできるだけ客観
的にとらえ、指導法については、現場でとられている方法とその効
果を明らかにし、さらに効果的と思われるいくつかの方法を実験的

に究明しようという計画である。

ここでは幼児についての実態調査の結果と、社会的な問題をもつ
子に対する保育効果の概要を述べることとする。

まず問題をもつ子の実態についての調査はつぎのような手続きで
行なった。

- (1) 調査期間 昭和三四年四月一〇日～五月一〇日
- (2) 調査対象 都内全域および、他の地域の田研会員の幼稚園・
保育所の協力を得て、回答を求めた。回答をえられたのは、幼稚園
五九、保育所一〇、合計六九であった。
- (3) 調査内容 調査の内容には次のようなものが含まれている。

- 一、問題児の氏名、性別、年齢
- 二、主な問題徴候（種類およびその状況）
- 三、その他の問題徴候（種類およびその状況）
- 四、
知能指数
- 五、本人の生育史上特別変わった事項
- 六、家族構成
- 七、両親の職業
- 八、両親の教育
- 九、家庭の経済状態

第1表 調査人数

性別	男			女			計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
調査対象	4,364	4,122	8,486	423	388	811	4,787	4,510	9,297
問題をもつ子	389	214	603	59	37	96	448	251	699
出現率(%)	8.9	5.2	7.1	13.9	9.5	11.8	9.4	5.6	7.5

問題徴候としては、あらかじめ、つぎの四九項目を、それぞれ、(a)ひどい、(b)かるい、あるいは、(a)いつも、(b)ときどき、などと二段階にわけてあげ、これらについての報告を求めた。

- | | | | |
|----|-----------------|----|--------------|
| 1 | 左利きの子 | 2 | どもりの子 |
| 3 | 夜尿症の子 | 4 | 頻尿の子 |
| 5 | 赤ちゃんことばの子 | 6 | 動作がのろい子 |
| 7 | 肢体不自由の子 | 8 | 難聴の子 |
| 9 | 弱視の子 | 10 | スキップがよくできない子 |
| 11 | 調子はずれの歌をうたう子 | 13 | 寝つきが悪い子 |
| 12 | 偏食の子 | 15 | Aデノイドのある子 |
| 14 | 鼻たらしの子 | 17 | 爪をかむ子 |
| 16 | その他めだつ病気をもっている子 | 18 | 瓜をかむ子 |
| 17 | 指しゃぶりの子 | 20 | 意地悪な子 |
| 19 | はなをほじる子 | 22 | おこりっぽい子 |
| 21 | 性器をいじる子 | 24 | 乱暴な子 |
| 23 | しつとする子 | 26 | でしゃばりの子 |
| 25 | 反抗的な子 | 28 | けんか好きな子 |
| 27 | 弱いものいじめをする子 | 30 | うそをつく子 |
| 29 | ボスになった子 | 32 | ひねくれた子 |
| 31 | 盗癖のある子 | 34 | 年上の子とだけ遊ぶ子 |
| 33 | いじけた子 | 36 | 泣き虫の子 |
| 35 | 変ったことをする子 | 39 | 神経質の子 |
| 38 | 規則を守れない子 | 42 | 神経心の強い子 |
| 41 | 依頼心の強い子 | 45 | 友だちと遊べない子 |
| 44 | 戸外で遊ばない子 | | |
| 47 | 知能発達のおくれている子 | | |
| 49 | 絵をかきたがらない子 | | |

〈結果とその考察〉

解答をえられた幼稚園五九、保育所一〇、合計六九の園児教九

二九七名の中から抽出された問題をもつ子六九九名について、集計処理を行なった。

(1) 問題別頻数

問題徴候の中、頻数の多かつた順に、幼稚園、保育所別に上位二五項目を記述すると、次頁の第二表に示すとおりである。この表をみてもわかるように、幼児の中で問題をもつ子として多いのが、左利きの子、赤ちゃんことばの子、動作がのろい子、乱暴な子、規則を守れない子などの順である。特に左利きの子は、六九九人中六八人(九・一%)もいて、かなりの数値を示している。

(2) 幼稚園児と保育所児との比較

ところで比較的多くいた問題の子を、上位から一〇項目だけ示すと、次頁の第三表のようである。

この幼稚園児と保育所児とを比較した場合、問題をもつ子の出現率は、第一表に示すように、幼稚園が男子八・九%、女子五・二%、合計七・一%であるのに対して、保育所では、男子一三・九%、女子九・五%、合計一・一・八%である。このように幼稚園に比較して、保育所の子どもの方が、四・七%も出現率が多い。また問題の内容も、上記のようにこの両者の間には若干の差異がある。すなわち幼稚園には、赤ちゃんことばの子、動作がのろい子、規則を守れない子、泣き虫の子、依頼心の強い子など、一般に家庭で溺愛され、盲愛されたために起こる問題が多い。そのため社会性に欠け、集団生活のできない子が多い。反対に、保育所では、反抗的な子、

第2表 問題別頻数

問題 徴 候	幼稚園			保育所			全 体		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
1. 左利きの子	43	19	62	3	3	6	46	22	68
2. 赤ちゃんことばの子	24	13	37	0	1	1	24	14	38
3. 動作がのろい子	15	17	32	2	3	5	17	20	37
4. 乱暴な子	24	6	30	7	0	6	31	6	37
5. 規則を守れない子	26	5	31	2	1	3	28	6	34
6. 鼻たらしの子	17	6	23	5	0	5	22	6	28
7. 泣き虫の子	12	14	26	1	1	2	13	15	28
8. おこりっばい子	16	5	21	3	3	6	19	8	27
9. 指しゃぶりの子	9	12	21	2	3	5	11	15	26
10. 依頼心の強い子	14	10	24	1	1	2	15	11	26
11. 気力のない子	10	14	24	0	2	2	10	16	26
12. 反抗的な子	11	5	16	8	0	8	19	5	24
13. 友だちと遊べない子	7	11	18	0	2	2	7	13	20
14. スキップがよくできない子	15	3	18	1	0	1	16	3	19
15. 神経質な子	10	9	19	0	0	0	10	9	19
16. でしゃばりの子	9	6	15	1	2	3	10	8	18
17. 偏食の子	8	6	14	2	1	3	10	7	17
18. ひとりて話のできない子	7	5	12	2	3	5	9	8	17
19. 頻尿の子	4	7	11	2	2	4	6	9	15
20. ひねくれた子	6	5	11	1	3	4	7	8	15
21. 知能がすぐれている子	11	4	15	0	0	0	11	4	15
22. 意地悪な子	3	6	9	2	3	5	5	9	14
23. ボスになりたい子	12	1	13	1	0	1	13	1	14
24. けんか好きな子	12	0	12	2	0	2	14	0	14
25. 変わったことをする子	11	1	12	1	0	1	12	1	13
計	337	190	527	49	34	82	385	224	609
全 体 の 合 計	418	234	652	65	36	101	483	270	753

(註) 各項目の男、女、計欄の上位の数字は主な問題徴候、下位の数字は、その他の問題徴候の頻数をあらわす。なお全体の合計は主な問題徴候として2つ以上記入したのもあったので、若干多くなっている。

第3表 幼稚園児と保育所児の出現率

幼稚園児の問題			保育所児の問題		
問 題	頻数	百分率	問 題	頻数	百分率
1. 左利きの子	62	9.5	1. 反抗的な子	8	7.9
2. 赤ちゃんことばの子	37	5.7	2. 乱暴な子	6	5.9
3. 動作がのろい子	32	4.9	3. おこりっばい子	6	5.9
4. 規則を守れない子	31	4.8	4. 左利きの子	6	5.9
5. 乱暴な子	30	4.6	5. 意地悪な子	5	5.0
6. 泣き虫の子	36	4.0	6. 指しゃぶりの子	5	5.0
7. 依頼心の強い子	24	3.7	7. 鼻たらしの子	5	5.0
8. 気力のない子	24	3.7	8. 動作がのろい子	5	5.0
9. 鼻たらしの子	23	3.5	9. ひと前で話のできない子	5	5.0
10. おこりっばい子	21	3.2	10. 頻尿の子	4	4.0

乱暴な子、おこりっばい子、意地悪な子、指しゃぶりの子などの問題をもらった子が多く抽出されている。これらの差は、幼稚園と保育所の特性からくるものと思われる。なお、これらの問題に共通していえることは、家庭における愛情不足、消極的・積極的拒否などから起こる問題である。

(3) 男児と女兒の問題の比較

子どもは三才から六才頃までは、未分化期とよばれ、他人に関心

をもつが、男女の区別をしないといわれている。しかし本調査による問題をもつ子の特色は、つぎに示すように性差によって若干異なる問題をもっている。

男児では、乱暴な子、規則を守れない子、おこりっばい子、反抗的な子など、一般的に積極的・能動的行為による問題と、反面溺愛されたり、放任されたりして、赤ちゃんことばの子、鼻たらしの子になった問題の子が多い。これに反して、女兒では、動作がのろい

第4表 男児と女児の問題の比較

男児の問題			女児の問題		
問 題	頻数	百分率	問 題	頻数	百分率
1. 左利きの子	46	9.5	1. 左利きの子	22	8.2
2. 乱暴な子	31	6.4	2. 動作がのろい子	20	7.4
3. 規則を守れない子	28	5.8	3. 気力のない子	16	5.9
4. 赤ちゃんことばの子	24	5.0	4. 泣き虫の子	15	5.6
5. 鼻たらしの子	22	4.6	5. 指しゃぶりの子	15	5.6
6. おこりっぽい子	19	3.9	6. 赤ちゃんことばの子	14	5.2
7. 反抗的な子	19	3.9	7. 友だちと遊べない子	13	4.8
8. 動作がのろい子	17	3.5	8. 依頼心の強い子	11	4.1
9. スキップがよくできな 子	16	3.3	9. 神経質な子	9	3.3
10. 依頼心の強い子	15	3.1	10. 頻尿の子	9	3.3

子、気力のない子、泣き虫の子、指しゃぶりの子、赤ちゃんことばの子、友だちと遊べない子、依頼心の強い子など、ほとんどが消極的・非社会的行為による問題の子である。このように五、六才頃で、問題をもつ子の間には、かなり男女に差がある。

(4) 出生順位との関係

本調査の結果、問題をもつ子の八七％が、末子、長子、一人っ子であったことは、いかにこの三者のしつけや教育が困難であることを示す。この中

も、末子は、問題をもつ子六九九人中、二四〇人（三四％）、長子が二〇二人（二九％）、一人っ子が一七一人（二四％）、その他の子が八六人（一三％）であった。（問題別頻数は省略）
アメリカの児童心理学の父といわれているスタンレ

ー・ホールは、「一人っ子だということは、それだけで、一つの病気である」といっているが、一人っ子や末っ子には幼稚園でも保育所でも問題の子が多い。そして、これらの子どものもの特長として、甘たれ、神経質、意志が弱い、依頼心が強い、友人と遊べない、早熟などがあげられる。また祖父母に溺愛・盲愛された子どもにも、この種の典型的な問題児が多い。また年老いてからできた子どもにも、同様の傾向がみられる。

×

×

第二年度には、さらにこの研究を進展させ、幼児・児童・生徒の問題をもつ子の出現率と幼児については、第一年度に調べた問題をもつ子の一年間の保育経過について調査を行なった。ここでは、その中「社会性のない子の保育経過」について報告する。

調査方法は、第一年度に問題児として報告された中、反社会性の子一三五人（出現率男子二四・一二％、女子一〇・七五％）、非社会性の子一五二人（出現率一八・七五％、女子三一・〇七％）、合計二八七人に対して、昭和三五年五月と六月にかけて、一年間の保育効果の測定を質問紙（五段階評価）により行なった。解答をえられたのは、反社会性の子六四人、非社会性の子二七人であった。ここに報告するのは、その結果である。

結果は、第一に反社会性の「おこりっぽい子」、「意地悪な子」、「乱暴な子」、「弱い者いじめをする子」、「ボスになりたい子」、「けんか好きな子」、「規則を守れない子」などの保育経過を示した。こ

れをみてわかるように、一年間でややよくなった、すっかりよくなった子が半数以上であり、全体では、六二・五%の子が効果をあげている。

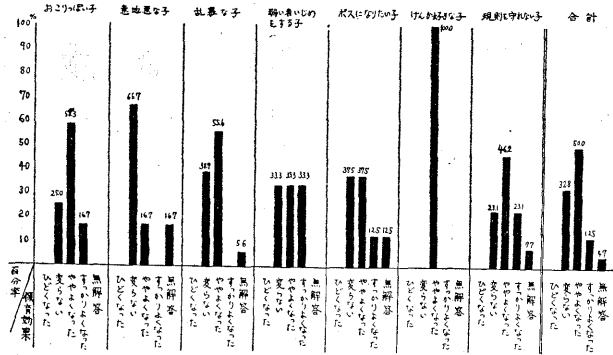
第二図には、非社会性の「しつとする子」、「泣き虫の子」、「依頼心の強い子」、「神経質の子」、「気力のない子」、「戸外で遊べない子」、「友達と遊べない子」、「ひと前で話のできない子」などの保育経過を示した。これらの子は、前者の反社会性の子よりも一層効果があり、特に、泣き虫の子、神経質の子、戸外で遊べない子などは八〇%以上がよくなっている。全体としては、七三・六%の子がややよくなったか、すっかりよくなっている。

以上の結果から、幼稚園や保育所における社会性の教育は、驚くほど効果をあげているといえよう。

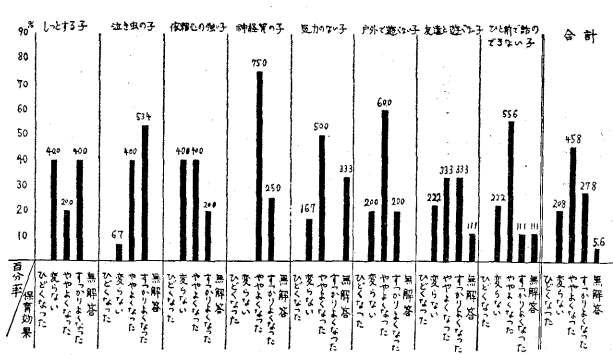
これらの指導には、つぎのような方法がとられている。反社会性の子の指導としては、子どもの求めるところをよく理解してやり、頭ごなしに口やかましく言いすぎないこと。子どもにも無理な注文をしないこと。なるべく欠点にふれたり、ついたり、あばきたてるようなことをしないでできるだけ良いところを見つけて自信をもたせること。皮肉やあてこすりはいわないこと。また集団生活によって自己を抑制させること。

非社会性の子の指導としては、少しずつお友だちとならし、小集

第1図 反社会性の子の保育経過



第2図 非社会性の子の保育経過



団から順々に大集団に入れる。そして、戸外の下でできるだけ運動量の大きい遊びをさせること。いいところを見つけてのばすようにし、自信をもたせることなどが効果をあげているようである。

(松原達哉記)